

FLES のシラバスに関する一考察

広島大学大学院

森 千 鶴

はじめに

以前から早期英語教育に関しては多くの論議がなされてきた。その是非について語られる時、必ずといっていいくらい「やり方さえよければ……」とか「やり方の問題」という言葉が聞かれる。その「やり方」とは何かを考えた場合、その最も基本的な部分としてシラバスが考えられる。本稿では FLES におけるシラバス作成の方法とあり方をイギリスの Nuffield Language Project を中心に考察する。

I シラバスの必要性和その包含すべきもの

Stern (1967) は子供に外国語を教える場合、L2 の language bath に浸すという方法もあるが、それだけでは不十分でそこにはやはり systematic learning が絶対に必要であると述べている。またシラバスが包含するべき要素として Finocchiaro & Bonomo (1973) は、①目的、②目標、③言語材料の項目、④強調されるべき文化的概念の項目、⑤言語材料が導入される場面についての記述、⑥評価のための suggestions、⑦教師の参考書や教科書の sources などの7つをあげている。ひとくちにシラバスといってもこれだけの要素を考えなくてはならない。こうした要素を決定していくためには具体的にどこに注意してどのような方法をとれば良いのであろうか。こうした問題を明らかにするため、Nuffield Language Project の方法を例にとり、これを中心に考察してゆく。

II Nuffield Language Project のシラバス作成の概要

The Nuffield Foreign Languages Teaching Materials Project はイギリスの小学校におけるフランス語の教材作成のために組まれた Project である。Project はシラバス作成をする際に以下の4つの点について考察している。

- 1) Practical Considerations
- 2) Methodology
- 3) Goals
- 4) Linguistic Considerations

一般的な考えでは Linguistic Considerations を最優先するが、この Project では①、②、③の3つを考慮に入れ、その制約を考えた上でなければ適切でないとしている。以下、ひとつひとつの項目について説明を加えてゆく。

① Practical Considerations

小学校の教室の実状を考えて使用可能な audio-visual aids を決定し、またそれと同時にこれらにかかる予算やクラスサイズ、授業数を検討する。

② Methodology

教材を実際に教える方法については、特定の“Nuffield Method”があるわけではない。教材は basic tools であると考え、教師が一番生徒にあう方法だと思われるものを選んで行なう。

③ Goals

コースを終えた後で、どの skill がどの程度まで伸びてほしいかということであるが、この Project で特徴的なことは goal の設定を receptive skills と productive skills とで分け、前者に重点を置いているということである。つまり receptive skills には高い目標が置かれている。(たとえば、子供が親しんでいる話題の範囲で native speaker の話を理解できる、日常的な読みものを読んで理解できるなど。)

④ Linguistic Considerations

以上3つの要素を考慮した上で初めて Linguistic Considerations に移ってゆくわけだが、Nuffield の場合は言語材料を選定するにあたって、フランスの CREDIF と共同して基礎研究を行なっている。この共同研究は教材の言語材料を acceptable なものにし、また教材の内容をよりおもしろいものにするために為されたものである。以下、この共同研究について若干説明を加える。

1) 目的と方法

この共同研究の目的は、子供達が日常使用している言語を録音し、分析することによって子供がよく使う文法・語いさらに興味を中心を明らかにすることである。方法は、イギリスの東南部に住む9才から12才の小学生を無差別に240名選びだして3人ずつの組にし、インタヴューが“uncontrolled interview”と“free play”を行なわせ、それを録音する。録音時間は約1時間。同じような方法でフランスの CREDIF も調査を行ない、情報交換をする。

2) 分析の方法

上記のような方法で収集した録音テープを以下のように分析している。まず、子供の興味に関しては、学校の内・外、家の内・外という基準で分類し、話題にのぼる頻度の高いものを調べ出している。それによると、子供が頻繁に話題にすることは、学校での勉強、教室活動、テレビや映画などであることがわかった。また言語分析に関しては使われている文法・語いの頻度調査が行なわれた。特に文法は言語の中の変化しにくい部分であるので重要視されている。文法の分析は Halliday の category grammar を参考にして作成した code に則して行なわれている。たとえば下の表は分析した1,000の clause のうち使われた時制を頻度の順に示したものである。

Table 1: “Tense” selection in the Verbal Group (1)

Code Number		
08	Simple present lexical verb (“takes”)	212
03	* Simple present grammatical verb	180
07	Simple past lexical (“took”)	71
13	Past in present (“has taken”)	67
52	Present modal (“can take”)	41
02	* Simple past grammatical verb	38
.	.	.
.	.	.
.	.	.
	Total	778

Handscombe (1966)

この朝査から、全体のうち 778 の clause に動詞が含まれていること、また動詞の時制は、“simple presentness” が全体の半分以上を占めていることがわかる。以上のような頻度調査の他にも、話されている話題にふさわしい文法や語いについての調査も行なわれている。これは、前後関係のしっかりした *actable situation* をつくるためである。こうした基礎研究を基にして Project は最終的な言語材料を選択している。言語材料の選択にあたって Project を設定した基準は以下の 5 つである。

- the interest of the children
- frequency of occurrence
- relevance

(その言語材料が子供の年齢にふさわしいものかどうか。)

- immediacy

(その言語材料がクラスや子供の間ですぐに使うことのできるものかどうか)

- teachability

(その言語材料は *whole-class presentation* という形で教師が教え得るかどうか。)

さらに、コースの始めの段階では *structurally-based selection* を行ない、最も基本的な構文や語いを導入し、コースがすすむにつれて次第に *topic-centered selection* に移るという方針を採っている。*topic-centered selection* とは、子供が興味を示した *topic* の中で頻繁に使われている語いや構文を抜き出し、さらにそれらを他の基準にも照らしてみても最終的に決定するというやり方である。ここで特徴的なのは、*frequency* ばかりに頼らないことであって、たとえば教室や家庭、学校できまって使われるような語いや構文(たとえば「黑板をふいて下さい」など)は、*relevance* や *immediacy* の点で重要な意味を持っているので、シラバスに組みこまれる。

III The Nuffield French course syllabus

以上述べてきたような方法で Project はシラバス作成を行なっているわけであるが、そうした *principle* は実際のシラバスを分析することでさらに明確化されるであろう。そこで、ここではフランス語コースのシラバス “En Avant” について若干検討を加える。Nuffield のフランス語コースは 8 才から 12 才までの児童を対象にしており、年齢別に STAGE 1 から STAGE 4 までの段階に分かれている。年間の授業時間数は週 4 回、30 週で計 120 回である。まず STAGE 1 (8 才～9 才) では基本的な *speaking, listening* の養成を目指して、少ない言語材料を *fluent control* できるようにとの配慮でシラバスが組まれている。1 年間で導入される構文は 73、単語は 189 で、あいさつや自己紹介などの自分の身のまわりのごく基本的なことがとりあげられている。STAGE 2 (9 才～10 才) では *reading* と *writing* が導入される。新出構文は 22、新出単語は 195 である。この段階で *workbook* や *reader* を使用し始める。STAGE 3 では *reading* の強化に目標がおかれる。そのため新出構文は 13 と少ないが、新出単語が 313 と急増している。STAGE 4 では、3 までと違って単語が 3 種類に分けて提示されている。すなわち、a. おもに *productive use* のために習得されなくてはならない語い、b. 読んだり聞いたりした時に理解できればよい語い、c. 理解することも使うこともできなくてよい語いの 3 種である。その中で、項目別にみると a は 120、b は 168、c は 81 であり、b の語いが多いことが判る。このことは、*receptive skills* を高いレベルまでのばそうという *goal* を設定していることと関係あると思われる。こうした分析から明らかになることは、あくまでもはじめの *goal* 設定が、シラバスに色濃く反映しているということである。

ある。たとえば、STAGE 1 では基本的な構文を比較的多く出してそれらの fluent use に目標をおくが、その後は新出構文は少なくなり、receptive skills をのぼすために新出単語の数が増えている。さらに STAGE 4 ではより具体的に、production まで要求される単語、understand だけでとどまって良い単語、そのどちらも要求されない単語というふうに分類されている。

IV Nuffield の示唆と問題点

以上、Nuffield のシラバス作成方法を概観したわけであるが、Nuffield の方法はいろいろのことを示唆していると思われる。まず、学習者中心のシラバス作成ということである。特に対象が児童であるということから、学習者の興味を明らかにし、さらにそれを中心に言語材料をも選定しているということである。このことは、生き生きとした actable な situation づくりということにもつながっている。すなわちトピックや場面にふさわしい語いや文法を選定するということである。また、今ひとつ示唆的であると思われる点は、シラバスを作成する前に明確な goal を設定し、それにふさわしいシラバスを作成してゆくということである。Nuffield の場合は、receptive skills に高い目標をおいており、シラバスには全体的に receptive skills を伸ばすための配慮が見られる。また、こうした最終目標だけでなく、年間目標を明確に設定し、それにあわせて言語材料の選択・配列が為されている。このことは、小学校のシラバスに限らず中学校や高校のシラバス作成にも示唆的なのではないと思われる。つまり、4つの skill に同じだけのウェイトを置くのではなく、どれかひとつだけの skill を中心的に伸ばしてゆく skill-centered syllabus が考えられても良いのではないかということである。

しかし、Nuffield のシラバス作成にも若干の問題が残る。ひとつには、基礎研究として行なった子供の言語分析そのものの限界である。すなわち、録音の状況により話題が限定されるので、子供の potential な興味をはたして知りうるのかどうかという問題である。さらに、学習者中心という作成態度そのものについての問題がある。すなわち、学習者が現在持っている興味だけを題材に選ぶのでは十分に教育的とはいえないのではないか。学習者に新しい興味をひきおこしてやるということにも意義があるのではないかということである。

おわりに

Nuffield のシラバス作成方法は、いくつかの点で示唆的であるが、また同時に重大な問題をも提起している。すなわち、FLES における学習者中心主義の問題である。これは児童をいかにして動機づけるかの問題と深くかかわっており、研究の余地があると思われる。また、さらに FLES においてはどの技能を最も伸ばしうるか、伸ばされるべきかなどの興味深い問題が残っているが、それらを今後の課題として本稿を終えたい。

REFERENCES

- CREDIF. (1966), *Enquete sur le Langage de l'Enfant Français*. (Nuffield Occasional Papers No. 20)
Finocchiaro, M & Bonomo, M. (1973), *The Foreign Language Learner: A Guide for Teachers*. (Regents Publishing Company)
Handscombe, R.J. (1966), *The First Thousand Clauses: A Preliminary Analysis*. (Nuffield Occasional Papers No. 11)
(1967), *Topics of Conversation and Centers of Interest in the Speech of Eleven- and*

Twelve-Year-Old Children. (Nuffield Occasional Papers No. 8)

(1969), "The Nuffield Child Language Survey," *Languages and the Young School Child.* (Oxford University Press), pp. 162–174.

Leclercq, J. (1969), "The CREDIF Child Language Survey," *Languages and the Young School Child.* (Oxford University Press) pp. 175–180.

Rowlands, D. (1972), "Towards FLES in Britain, Part II," *MLJ*, February, pp. 80–86.

Spicer, A. (1969), "The Nuffield Foreign Languages Teaching Materials Project," *Languages and the Young School Child.* (Oxford University Press), pp. 148–161.

Stern, H.H. (1967), "Introducing a Language in the Primary School," *The Teaching of Foreign or Second Languages to Younger Children.* (Oxford University Press), pp. 79–93.

なお、貴重な資料を貸して下さった広島大学総合科学部の西田正教官に深く感謝したい。